

明治以降の山崎の年表（九）



NO. 136
令和3.2.20

山崎郷土研究会
兵庫県宍粟市山崎町

大 谷 司 郎

大谷司郎

昭和五十四年から五十八年の頃

明治以降の山崎を中心とした出来事を年表にして九回目になります。今回は、昭和五十四年（一九七九）から同五十八年（一九八三）までを取り上げます。広報やまさき（月刊）から拾う事項が多くな

兵庫やまさき全国さつきマラソン大会始まる 中高年層を中心とし

た健康づくりのためのマラソンブームを受けて、山崎スポーツセンターを発着点として「ゆっくり走ろうさつきのまち」をスローガンに第一回大会が昭和五十四年（一九七九）五月二十七日に実施されました。当初は山崎商店街を走るコースが設定され、町内が賑わいを見せました。

さつき音頭の発表会 昭和五十三年にさつき音頭のレコードが発売

され、振付講習会、揃いの浴衣の普及を経て、翌五十四年の第二〇回さつき祭りではさつき音頭の発表会と踊りの披露も行われ、賑わいました。

目次

明治以降の山崎の年表（九）	大谷司郎	1
山崎の美術の流れ（二）書道	伊藤一郎	4
空中写真と地図（その5）	清水哲	
福原謙七の節儉について	松下宣夫	
『論語』のもう一つの読み方	高井淳	
山崎歴史郷土館（六）	河本雅視	
山崎町金谷四号墳の発掘調査		
.....	宍粟市教育委員会	
金谷古墳を守る会について	田路正幸	
会員・家族の文芸	片山昭悟	
.....		
事務局だより・編集後記・会員の著作紹介		
.....		
25	24	22
25	24	22
18	15	12
	10	6

明治以降の山崎の年表(17) 昭和54年~58年

西暦年	和歴	年	月	日	事 項	出 典 等
1979	昭和	54	5	7	西兵庫信用金庫本店が山崎町山崎190番地へ新築移転となる。	西兵庫信用金庫五十年史
1979	昭和	54	5		金谷地区団体営圃場整備事業の中比地地内工事が完成する。	広報やまさきNo.307
1979	昭和	54	5	27	兵庫やまさき第1回全国さつきマラソン大会が開催される。	広報やまさきNo.304
1979	昭和	54	5	31	さつき音頭のゆかた発売され、婦人会員とりまとめる。	広報やまさきNo.306
1979	昭和	54	6	2	~4 第20回さつき祭りが山崎小学校グランド、さつきセンター、郡園芸センターで行われる。「さつき音頭」の発表会も行われ20万人の人出で賑わう。	広報やまさきNo.307
1979	昭和	54	8		町長選挙で谷口巖氏が当選し、町議会議員20名が決まる。	広報やまさきNo.310
1979	昭和	54	9	6	第161回議会で議長に川前房夫氏、副議長に田中市郎氏が選任される。	広報やまさきNo.310
1979	昭和	54	10		宍粟炭復活へ一省エネ新窯も続々と一	神戸新聞西播のページS54.10.03
1979	昭和	54	10	10	第8回町民運動会がスポーツセンターで実施され、5,000人が参加する。	広報やまさきNo.312
1979	昭和	54	11		山崎町立図書館の閉館日が日曜日から月曜日に変わる。	広報やまさきNo.312
1979	昭和	54	11	2	~4 第15回山崎町美術展が山崎小学校講堂で実施される。	広報やまさきNo.312
1979	昭和	54	11	18	第1回山崎町芸能大会が山崎小学校講堂で行われる。	広報やまさきNo.313
1979	昭和	54	11	23	第2回秋の音楽祭が山崎小学校講堂で行われる。	広報やまさきNo.313
1979	昭和	54	12	1	~2 第5回農業祭が農協会館で行われる。	広報やまさきNo.313
1980	昭和	55	3	26	山崎浄苑(し尿処理場)が川戸に完成し、竣工式が行われる。	広報やまさきNo.317
1980	昭和	55	4	6	神野コミュニティセンターが田井に建設され落成式が行われる。	広報やまさきNo.318
1980	昭和	55	4		金谷地区団体営圃場整備事業が完成する。	広報やまさきNo.318
1980	昭和	55	5		山崎町商工会館が落成する。	神戸新聞西播のページS55.5.7
1980	昭和	55	5	2	山崎保健センターが鹿沢に建設され落成式が行われる。	広報やまさきNo.318
1980	昭和	55	5	4	兵庫やまさき第2回全国さつきマラソン大会が開催される。	広報やまさきNo.318
1980	昭和	55	5	5	菅野農村集落センターが青木に建設され落成式が行われる。	広報やまさきNo.318
1980	昭和	55	5	28	河東幼稚園新園舎の竣工式が行われる。	広報やまさきNo.319
1980	昭和	55	5	31	~6/2「ひょうご文化100選」選定記念として、第21回さつき祭りが山崎小グランド、町立さつきセンター、郡園芸センターで行われる(人出11万人)。	広報やまさきNo.318、No.319 神戸新聞18面S55.5.23
1980	昭和	55	6	29	伊水小学校の新校舎が完成し竣工式が行われる。	広報やまさきNo.320
1980	昭和	55	7	20	山崎町合併25周年記念式典が下村記念館で行われる。	広報やまさきNo.321
1980	昭和	55	8	23	健やかな子どもを育てるシンポジウムが500人の参加のもと農協会館で実施される。	広報やまさきNo.322
1980	昭和	55	9	13	~16「第10回青年国内研修」が実施され、9名の青年が石川県で交流研修をする。	広報やまさきNo.323
1980	昭和	55	9	24	第172回議会で議長に田中市郎氏、副議長に八井芳治氏が選任される。	広報やまさきNo.323
1980	昭和	55	10	1	国勢調査による山崎町の人口が26,764人となる。	広報やまさきNo.327、No.335
1980	昭和	55	10	4	第1回山崎八幡神社薪能が行われる。	広報やまさきNo.324 神戸新聞西播面S55.10.1
1980	昭和	55	10	12	最上山に俳人和田疎人氏の句碑できる。	神戸新聞西播面S55.10.10
1980	昭和	55	10	24	初の模擬町議会が中学生議員20名で行われる。	広報やまさきNo.324
1980	昭和	55	11	1	5周年を迎えた中国ハイウェーバス	神戸新聞姫路西播面S55.11.5
1980	昭和	55	11	23	町立さつき園で創立5周年記念祭が行われる。	広報やまさきNo.325
1980	昭和	55	11		『山崎の歴史』(山崎町史の副読本)が発行される。	神戸新聞姫路西播面S55.11.20
1981	昭和	56	2		町木が「ひのき」に制定される。	広報やまさきNo.327
1981	昭和	56	2	27	山崎町商店街 除雪作業に汗流す。山崎町五十波でマイナス8.9度を記録する。	神戸新聞西播面S56.2.28

明治以降の山崎の年表(18) 昭和54年～58年

西暦年	和暦	年	月	日	事 項	出 典 等
1981	昭和	56	3	15	第2回山崎町健康展が保健センターと山崎中学校体育館で開かれる。	広報やまさきNo.329
1981	昭和	56	3	17	兵庫県山崎庁舎が今宿に完成し、宍粟福祉事務所が同庁舎へ移転する。	宍粟福祉のあゆみ
1981	昭和	56	3	18	兵庫県山崎庁舎に山崎保健所が入る。	神戸新聞西播面 S56.3.17
1981	昭和	56	3	29	戸原小学校校舎の竣工式が行われる。	広報やまさきNo.329
1981	昭和	56	4	15	第26回兵庫県緑化大会が須賀沢大谷広場で行われる。	広報やまさきNo.330
1981	昭和	56	5	9	組合立三土中学校体育館の竣工式が行われる。	庁内広報515号
1981	昭和	56	5	3	兵庫やまさき第3回全国さつきマラソン大会が行われる。	広報やまさきNo.331
1981	昭和	56	5		河東北地区野々上工区の圃場整備事業が完成する。	広報やまさきNo.331
1981	昭和	56	6	6	～8 第22回さつき祭りが山崎小グランド、町立さつきセンター、郡園芸センターで行われる(人出数万人)。	広報やまさきNo.332
1981	昭和	56	7	25	山崎町森林組合事務所が町職業訓練センター横に完成し、竣工式が行われる。	広報やまさきNo.333
1981	昭和	56	8	5	中学校の整備統合に向けた特集号が発行される。	広報やまさき特集号
1981	昭和	56	8	23	やまさきチルドピア81が山崎幼稚園周辺で行われる。	広報やまさきNo.334
1981	昭和	56	9		第179回議会で議長に森岡貞夫氏、副議長に柏木七五三一氏が選任される。	広報やまさきNo.335
1981	昭和	56	10	1	町立養護老人ホームが「長水園」に名称変更する。	広報やまさきNo.336
1981	昭和	56	10	4	魚菜市場が完成し、竣工式が行われる。	庁内広報537号 S56.9.28
1981	昭和	56	10		町道庄能上牧谷線の下町一宇野間が一部完成する。	広報やまさきNo.361
1981	昭和	56	10	24	第2回山崎八幡神社薪能が行われる。	広報やまさきNo.336
1981	昭和	56	11	4	上水道通水50周年記念式典が上寺浄水場で行われる。	広報やまさきNo.337
1981	昭和	56	11	8	第1回郡民短歌祭が下村記念館で行われる。	広報やまさきNo.334
1981	昭和	56	12	15	第181回町議会で副議長に前田重孝氏が選任される。	広報やまさきNo.338
1982	昭和	57	1	17	第10回山崎町ロードレース大会がスポーツセンター発着で行われる。	広報やまさきNo.338
1982	昭和	57	1	25	須賀沢に協同組合宍粟郡木材流通センターの一部が完成し、操業式が行われる。	広報やまさきNo.339
1982	昭和	57	1		山崎町ボランティアバンクが開設される。	広報やまさきNo.338
1982	昭和	57	2		『やまさき文化第1号』が山崎町文化連盟から発刊される。	やまさき文化第1号
1982	昭和	57	3	13	～14 第3回山崎健康展が農協会館で行われる。	広報やまさきNo.341
1982	昭和	57	5	2	兵庫やまさき第4回さつきマラソン大会が行われる。	広報やまさきNo.343
1982	昭和	57	5		町道庄能線が開通する。	広報やまさきNo.343
1982	昭和	57	6	5	～7 第23回さつき祭りが山崎小グランド、町立さつきセンター、郡園芸センターで行われる(人出は約15万人)。	広報やまさきNo.344
1982	昭和	57	6	10	高所にある播州山崎・花菖蒲園がオープンする。	広報やまさきNo.343
1982	昭和	57	8	21	チルドピア82が小学生300人の参加をえて山崎小学校を中心会場に行われる。	広報やまさきNo.346
1982	昭和	57	9	10	笠杉トンネルが開通し、竣工式が行われる。	庁内広報585号 S57.9.6
1982	昭和	57	9	27	第187回議会で議長に田中市郎氏、副議長に高橋喜信氏が選任される。	議会だよりNo.19
1982	昭和	57	9		県営三谷住宅(36戸・3階建)が中山台に完成する。	広報やまさきNo.346
1982	昭和	57	10	15	～17 第1回町民フェスティバル・山崎まつりが山崎小グランドで開催される。	広報やまさきNo.348
1982	昭和	57	10		町道庄能上牧谷線の宇野一下牧谷間が一部完成する。	広報やまさきNo.361
1982	昭和	57	11	18	宍粟郡木材流通加工センターの竣工式が行われる。	広報やまさきNo.349
1983	昭和	58	2	1	老人保健制度スタートする。	広報やまさきNo.360
1983	昭和	58	3		中国自動車道山崎チェックバリア検札が開始される。	議会第201回のあゆみ
1983	昭和	58	3		山崎町議会及び町長選挙の公営ポスター掲示場を設置する条例が制定される。	広報やまさきNo.365
1983	昭和	58	5	1	兵庫やまさき第5回さつきマラソン大会が行われる。	広報やまさきNo.365
1983	昭和	58	6	4	～6 第24回さつき祭りが山崎中学校グランド、町立さつきセンター2会場で行われる(人出10万人)	広報やまさきNo.366
1983	昭和	58	8	1	山崎町少年補導委員会を設置する(委員20名)。	広報やまさきNo.369

山崎の美術の流れ（一）書道

伊藤一郎

漢字は現在、中国と日本で使用されています。象形・指事から発達した表意文字です。紀元前中国殷（いん）の時代にすでに用いられていました。

前衛書道は、純粹に点・線・墨色・余白の美を追求する様式で、宍粟市内では、戦後飛雲会に所属されていた田内龍陽先生が漢字と前衛書道を推進されました。活躍されたのが、中川艶龍・竹田長龍・平山憲龍・浅田登仙の各先生方で、現在の美術協会理事の清水喜峰先生は、中川先生の門下です。私は、二十歳代に田内門下の志水民男先生に、漢字を教わりました。田内門下全員による、一泊研修会は、夜も寝ずして書道三昧の厳しい研修でした。

仮名文字は、日本独自の書体です。宍粟市において仮名文字で活躍されたのが、明治四十年（一九〇七）生まれの山本御舟先生です。先生は、昭和十五年（一九四〇）に文部省検定教科書「高校書鑑」I II IIIを辻本先生と共に著されています。昭和三十一年（一九五六年）四十九歳で日展特選、昭和四十年（一九六五）日展菊花賞授賞、昭和四十一年日展審査員・親和女子大学講師、昭和四十二年N H K婦人百科仮名講師で出演されました。先生は下三方村の生まれで、山崎小学校にも勤務されていました。先生の所属していた桑田笠舟門下には、山崎町鹿沢にて書道塾をされていた井口滋子先生がおられました。御舟先生は神戸に移つてからも、宍粟郡内の書道教育の

指導を献身的にされました。講習会の参加者には尾崎正一元教育長・木村吉計・柄尾律文・太田了などの先生方がおられ、同期生の片山元治先生も書道普及に協力されました。

子ども達への指導も熱心にされ、山崎町内の書道熱は高まり、私の小学生の時には「中小学生による書道展」があり、金賞・銀賞等の審査を御舟先生がされていました。秋が深まる頃には、山崎小学校の旧講堂で、学芸会が盛大に行われ、ハイライトは学年代表による席書会でした。日展八回入選された山部一翠先生にお話しを聞くと、昭和二十三年（一九四八）六年生の時に、「席上揮毫」を書いたとのことでした。

日展五回入選された一翠先生のお姉さんの山部桂翠先生の書道塾へ私は四歳の時から通つており、小学一年生の時は、仮名二文字、小学三年生の時は「宇宙天体」と書いたことを憶えています。山部先生御兄弟は、井口先生の塾から御舟先生の門下に入られたとのことです。お二人とも、御舟先生の遺志を継ぎ地域の書道の向上に寄与されています。美術協会においても、永く顧問として作品を出展されています。

今は、日展に入選された寺村舟裕先生が、美術協会の理事として書道部の世話をされ、門下の志水あゆみ先生とともに美術協会の理事です。

御舟先生の遺作展が二十年前に山崎文化会館で行われ、作品が地元一宮北中学校に寄贈されたとのことです。

現在、仮名文字書道にて活躍されているのが、牧野聖雲先生の書道会です。常に日展に何名かが入選されています。牧野先生は昨年

の日展で特選入賞されました。

西脇呉石先生の流れをくみ山野龍石の全日本書道連合会に属する中島大作先生は、大山書道会を運営されており、門下の伊藤利舟先生は、利舟会を立ち上げておられます。

永く美術協会理事をされていた山本千里先生も書道塾をされています。

追伸 昨年の日展において、洋画の部でも志水和司先生が特選入賞されました。おめでとうございます。

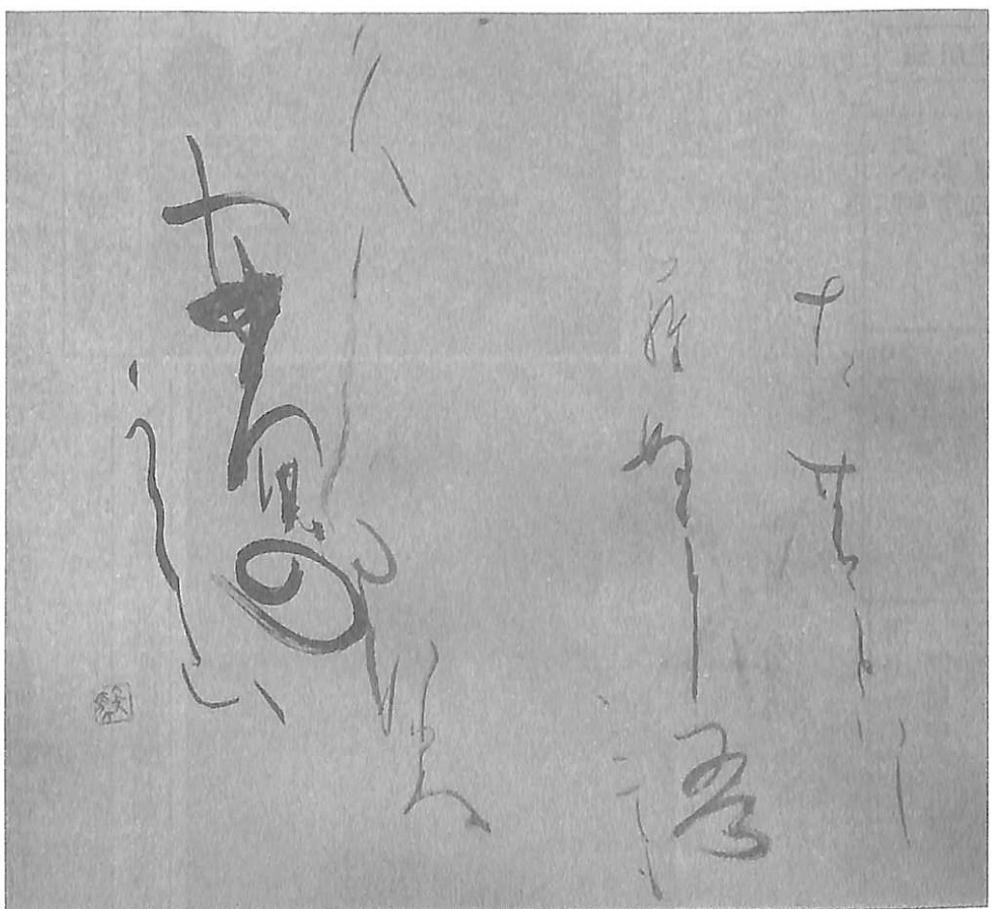
前号の「山崎の美術の流れ（二）」で、山崎文化会館の縞帳の制作を秦誠先生と表示しましたが、松井叔生先生が下絵を描かれ、縞帳の制作会社との交渉を秦先生にお願いしたことでのお詫びをし、訂正いたします。



山本御舟先生

万葉歌

古のことはしらぬを呑みても久しくなりぬ



空中写真と地図（その5）

清水 哲

一 生谷橋石碑の調査報告

(一) 前回の会報に、峠道・山道・中川医院前の道などについて書かせていただいた。その中で生谷橋にかかる弘化二年（一八四五）の石碑についてふれた。土に埋もれ少ししか見えなかつた石碑の右側と裏側について、大谷会長の尽力により、十月六日に教育委員会の田路・堀両氏に来ていただき調査することが出来た。その結果について、私にはこのような調査や報告書作成の経験もなく書式も知らないので、左に大谷氏による概況報告を引用させていただく。

調査日・令和二年十月六日（火）

調査者・清水 哲・田路正幸・堀 寛之・大谷司郎

立会者・鳴浜義則氏（山崎町庄能）

調査概況

山崎郷土会報一二五号に清水哲氏が寄稿された「空中写真と地図（その4）」において、土砂留めに使つてゐる石碑の表出してゐる二面は解読文字が紹介してある。今回残りの二面を調査すべく、石碑を立てるなどを試みたが、重くて出来ず、土砂を少し取り除いて左記の文字が確認できた。残る一面（真下の面）は文字の刻みが確認されなかつた。石碑を元の位置に戻し、土砂を埋めて元のように復元した。

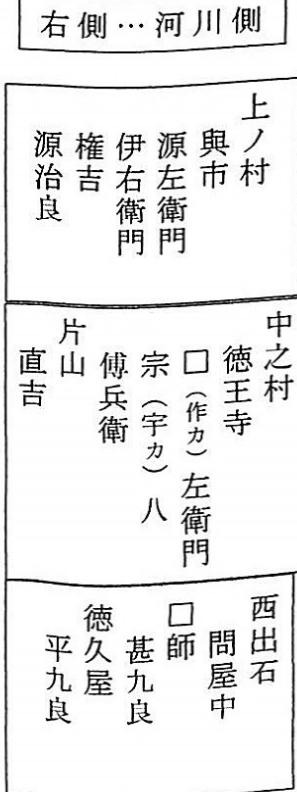
石碑の見えない側を見たいという素人の願いを、教育委員会がかなえてくれたことに感謝している。左の写真でわかるように狭い隙間に交互に顔やカメラを寄せて読み、大谷氏が左記の様に筆記した。

左：写真①石碑を確認する
大谷・田路・堀の各氏

左：写真②新たに全部が見えた河川側（右側）

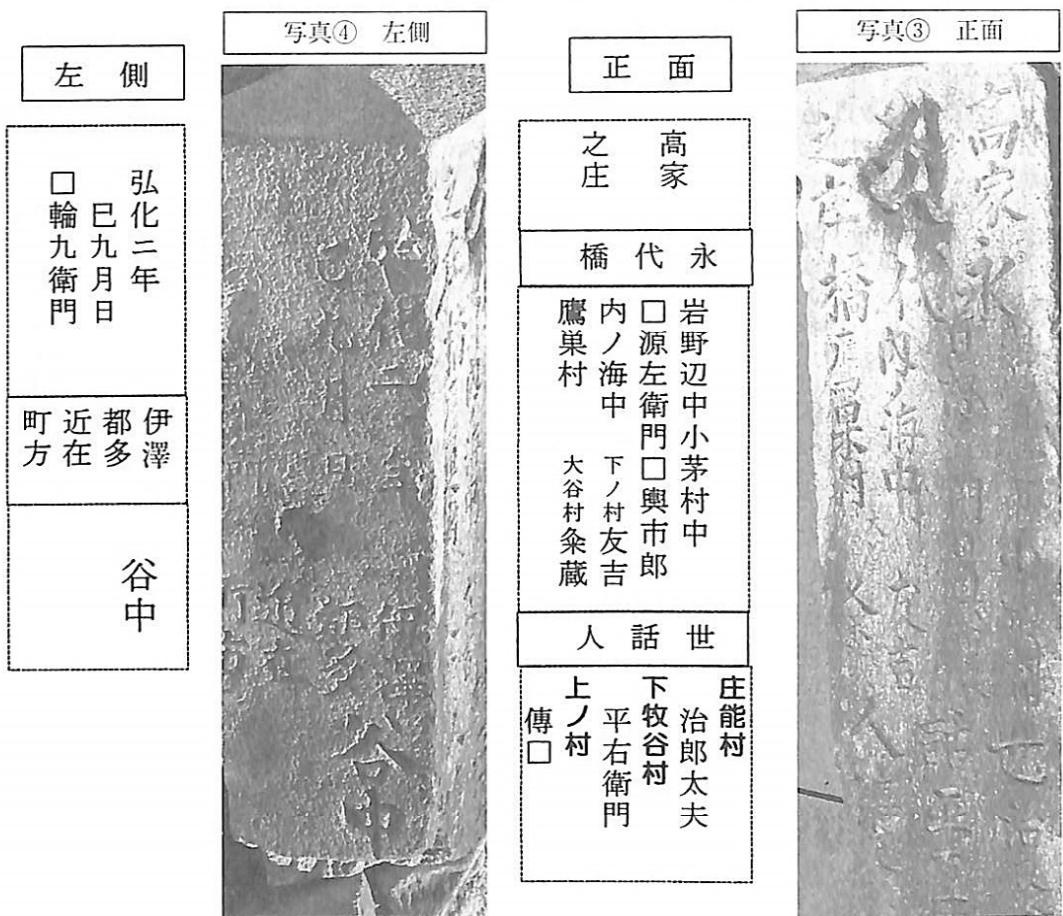


(二) 今回新たに全部が見えた右側（河川側）の文字



(三) 前回紹介した石碑の正面と左側の写真と文字を再び掲載する。

正面については、左の写真③ではよくわからないが、最下段の微妙な陰影から田路氏が新たな文字を読みとった。その箇所を太い文字で示した（写真②ではかすかにそれらしきものが）。



二 考察（以下、前号に書いたことと一部重なるが）

(一) 「高家之庄」とはここでは今宿・庄能・上寺・横須から伊沢川中流域にかけての地域のこと。

(二) 「永代橋」とはこの時の生谷橋の名前であろう（橋の名前は同じものが全国にみられるそうである）。

(三) 正面下段に「世話人」と横書きがあり、その下に三人の名前がある。当初この三名が橋建設の世話人かと思っていたが、今回見えた河川側の面も何々村の誰それと同じ書き方になっている。正面三段目以降は、この橋の建設を願つた村と主導した人物（世話人）ではないだろうか。それにしても石碑正面のあの場所に「世話人」と刻んだのはなぜか、やはり三人が中心的役割を果たしたのか、それとも正面上段に横書きを三つも並べるのはデザイン上よくないと考えたのか、よくわからない。

(四) 石碑河川側に、当時の宍粟郡における物資輸送の拠点（高瀬舟の発着場）である出石の船問屋や町の店の名前がでてくるのは、生谷橋を通るこの道は伊沢川沿いの村々及びその北の千種の村々の人と物が往来する大切なルートであつたからだろう。

(五) 『山崎町史』七二五頁には宍粟郡の南北を結ぶ交通路について、揖保川筋で一宮・波賀方面へ行くルートと、切窓峠・八重谷峠越えで千種川流域へ行くルート、途中で分かれて土万から塩地峠越えて千種へ行くルートをあげている。

元禄国絵図においては、上ノ村→小茅野村→宇津見村（内海村）→岩野辺村の峠越えルートが赤い線で描かれている。生谷橋はその起点であったのだろう。

三 山道・峠越えから谷底コース

(二) 古い地図のみならず現在の国土地理院の地図にはあちこちの集落を山越え（峠越え）で結ぶ小径が破線で書かれている。つい七年ほど前までは、谷筋のちがう山の向こうの集落へ大回りすることなく、直線的に峠越えで往き来したこともあったからだろう。重機の無い時代に川沿いに道をつくることは難しかったと思う。

前号で与位の洞門が出来る前に、古い地図に田井・与位間の山越えルートが書かれていることに触れた。あとで地元の方に、田井の神社付近から与位への山越えの道があつたことを教えてもらつた。

(二) 『千種町史』には明治大正時代篇に「道」の項目がでてくる。一〇三五頁に「明治二三年に、下河野村の阿踏を通つて三河村・山崎町へ通ずる道は開通し、峠や峠（たわ）を越えなくもすむようになつた」という記述がある。先述の塩地峠越えに代わる千種川沿いの谷底コースのことであろう。さらに「しかし道幅が狭く、雨が降ればぬかるみ、物資の輸送は困難だった」と記述は続く。

沿道の村々に重くのしかかる道路修繕費用の軽減のため、また宍粟郡の産業発展のためとして、大正五年に郡内一九の全町村長は連名で千種村・下三河村間の里道を県道にという請願を出し、大正七年に県道に編入された。材木などの林産物や消費物資を運ぶ荷馬車（車力）の交通量が増えたことが背景にある。

さらに、千種・西谷（波賀町）間の道路、千種・東栗倉間の道路を県道に編入する請願がなされている。物資のみならず、祭や芝居の見物に徒步で峠を越え往き來する交流があつたそうだ。

荷馬車・自動車の出現と重機などの発達もあり、前回引用した論

文の言葉の通り「谷底コース」の時代になつていつた。

四 弘化二年の山崎藩『国元覚帳』から

左は弘化二年の八月一七日の条に書かれたものである。

一
立花村生糸村と音羽波入た。此年猶當
多よ。村は無き者有。而之江原又
御手取也。下多又世作人食ひて其物
仕合ひ。又立花村木主の頼山也。而之
用。而本主の室の私相もあ。而本の事
度の立花平野也。

一
松木屋に向風。梅庵を宿す。
指本指本

一
同番ど向。此後本音多在宿
小本音多

一
同番ど向。指本もしく不
但立花

写真⑤

(一) 文章の要旨 江戸時代の文章は至る所に「候」という文字が使われる。また句読点が無く主語もあいまいなため、誰がどうしたのか、話がどう展開したのか解りづらいが、意訳を試みる。

「庄能村・生谷村・上寺村の村役人から生谷に橋を架けたいとの願いが出され、藩としては許可した。ところが上ノ村の傳（伝）右衛門という者が、私が企画して今度架ける橋を土橋にしたいので、藩

の山から松などの材木を提供してほしい、と願い出てきた。

伝右衛門によれば、万一土橋が流失したなら当初の許可通り板橋にする。その後また土橋を架けようということになつた場合には、もう藩に材木提供のお願いはしないとのことである。今回だけの特例として認めることにした。」

おおよそこのような意味ではないかと思う。

(二) 木橋は洪水でよく流されたらしく、架け直し工事は珍しくなかつただろう。藩としては、橋が直れば物資の輸送ひいては領内の産業が盛んになるのだから、今風にいえば「公共投資によりインフラを整備する」ということだろう。

後半の松材の各種類については、用語の意味も橋のどの部分のことかもよく解らない。深河谷の木橋の写真から推測すると、川の中に鳥居型の橋脚をいくつか立てて橋桁を渡し、その上に板か丸太を敷くという構造ではないかと思う。土橋は、橋桁の上に丸太を並べその上に土を敷き固めて舗装し通行しやすくしたものようだ。

(三) 右の山崎藩『国元覚帳』の文章において、土橋への変更の世話役を買って出た上ノ村の「伝右衛門」の名前は石碑のどこかにあるのだろうか。正面最下段の「上ノ村 傳」の下は不明の字にしているが、「左」の字に見える。石が欠けているが、「傳（伝）左衛門」と書こうとしたのか。同一人物名を石碑に刻むとき、又は覚帳に記す際に間違えたかもしれないし、元々石碑に書かなかつた可能

性もあるし、この二つの史資料ではわからない。

五 おわりに

(一) 左の木橋の写真は『ふるさと戸原』(平成二三年刊行)に載せられた宇原橋、昭和二八年五月の渡初式のこと。同誌によれば、昭和三五年八月の台風で戸原橋とともに流失した。戸原橋は昭和三六年に、宇原橋は昭和三七年に鉄筋コンクリート橋になつたそうだ。戸原橋は現在新しくなつている。

話はかわるが、清野と島田を結ぶ清姫橋のたもとに記念碑がある。昭和三八年に木橋の清姫橋が流失、場所を替えて現在地に新しい清姫橋が出来たとのことである。



宇原橋 渡初式 昭和28年5月

(二) 与位の洞門のそばに説明の看板がある。「この洞門をくり抜いた屹（がけのこと、歩危）：」とあり、屹の字に「ほき」とふりがなをしている。どうしてこうなつたのかを考えたが、大正十二年の『兵庫縣宍粟郡誌』がこの場所の崖を示すのに「屹」という文字使つたのが始まりかもしれない。「屹（たわ・撓）とは尾根の低くたわんだ個所であり、岨（ほき）とは険しい崖である。屹や岨で一年が過ぎた。

福原謙七の節儉について

『日本經濟立志編』から

松下宣夫

明治初期の地方官僚について童門冬一は次のように述べている。

「明治初期の地方官は、氣概あり、能力あり、一定の民生への責任感をもつた進歩的な志士官僚が少なくなかった。彼等が明治の開化に果した役割は大きい。それは当時の國家機構がまだ未熟で、政府の命令と言つても大筋を示すだけの不備なものにすぎなかつたから、彼等は絶えず独自の状況判断と、細目を具体化する独創力を求められていた」（注1）福原謙七（以下は謙七と記す）はここで言う「志士官僚」で、気迫と知性、そして何よりも国政を安定させ経済を振興するという志を持つていました。以下小論においては『日本經濟立志編』（注2）に見られる節儉論をへ資料1・資料2へ読み込み、そこにある深い儒学の知識と広い知見に注目し、それが謙七の後の政治活動に連なつてることを見ていただきたい。

記述を進める前に、この書の著者名欄等に福原謙七編輯明治十四年三月新刊とあることに留意しておかねばなりません。即ち、発刊の前に公刊された書物、新聞などから謙七が『日本經濟立志編』としてふさわしいとした経済論を探し、選び編輯するというのが謙七のスタンスであるということです。従つて、この書には謙七の価値観がもろに出ていると考えることが出来るのです。第一は政府財政の困難克服です。謙七は国民が節儉することに就いては、今日より

急迫したことはなかつた。それは国の内外や時の古今を問はず必須のことである、と述べています。以下引用文はへへで示している。

資料1へ何となれば輸出輸入の不平均よりして金銀貨沸騰、諸物價も之に準じ沸騰す之れが爲め、畏れ多くも政府財政の困難たる、言語の得て盡すべきにあらず下人民に於ても其困難たる亦た言語の得て盡すべきにあらず是を時勢の止むを得ざるに出つるに委し、徒に口に困難困難とのみ云ふて非常勤儉を履行せざるときは此の天下を擧げ疲弊の極みとなさしむるや前知すべきなり今日にして甲人非常の勤儉を履行しつゝ人も亦非常の勤儉を履行し其勤儉の履行遂に一村となり一郡となり亦遂に天下の廣きに及ばは興産自然盛大に赴むき従ふて輸出入の平均を得るに至る、嗚呼勤儉の事たる、國の内外を問はず時の古今を論ぜず、聖主賢輔の必ず主張する所のものなり況や目今財政の至難至危に遭遇し來れば一瞬時間と雖も恬然懸念せざるの無情なるあるは其れ之を何にとか言はん因て左に節儉奢侈の利害得失を諸書に就き抄録し以て同志に示すと云ふ（原文を尊重し旧漢字で表記、また読点は原文のままです）

この文章は『日本經濟立志編』の目次のすぐ後ろに謙七の見解として書き加えられたもので、

謙七の主張です。

これは、大隈財政の基本即ち、「明治十（一八七七）年以來紙幣価値の下落と物価騰貴の原因を洋銀相場の騰貴に求め、これは正貨の欠乏によ



『日本經濟立志編』表紙

りくるとし、これを正すのは輸出入の不均衡の是正で、この爲には

国内産業の振興が必須である」（注3）を大筋に於いて踏まえた今日の経済学の定説のレベルといえる。

第二は干河岸貫一（ひがしかんいち）の『日本立志編』（注4）からの引用で『日本經濟立志編』の冒頭に位置づけられているもので、『論語』や『大學』・『孟子』への十分な理解の上に書かれています。「衣食足りて礼節を知る」（注5）は昔からの格言です。

衣食が不十分であれば、人は礼儀と節度のある暮らしが出来ず、父母に仕え妻子を養うことが困難である。志や主義に背いたり、清らかで恥を知る心をなくしたり、友の信頼を失つたりするのは節約を努めず浪費の暮らしをしているからです。身を修め家を齊るには家計が急迫しないよう日頃から心がけねばならない。顔回が食や飲み物が少しでも耐える備えをし（注6）、曾参が父に酒肉を供し得たのも、日頃の備えや、家に財があつたからである、とは容易に推し量ることが出来ます。

資料2へ衣食足つて礼節を知るとは古人の格言にして、衣食足らざれば、仰いで父母に事へ俯して妻子を養ふすら其資給し難きに困む、何んの餘力あつてか其を顧みるを得んや、故に志操を挫折し廉耻を破り信義を朋友に失するに至るは、皆な平生検束せずして冗費濫用する所多きに由る、身を修め家を齊ふは先ず衣食の計に窘迫せざるの用意を爲さざる可らず、故に顔回の貧猶ほ簞食瓢飲、以て飢渴を療するに足る、曾参の其父を養う必ず酒肉ありと云ふ者何んぞ今世の人士中、動もすれば負債堆積し督責四も至るも、猶ほ美酒鮮肴に醉飽するが如きものならんや必ず家道の以て、此の如くするに

足るあるに由てなりしは推知すべし

おわりに 明治十四年に、東京から離れた僻遠の地で『日本經濟立志編』が著されたこと、深い儒学の学識と該博な知識や世界観によつて編集されていること、国学的見地からする財政論が展開されていることなどから、私には謙七が宏栗の優れた偉人の一人と思えます。

参考文献

（注1）童門冬二『涉沢栄一・人間の基礎』（株）経済界 一九九一年発行
（注2）福原謙七編輯『日本經濟立志編』（国立国会図書館デジタルコレクション）

『日本經濟立志編』福原謙七編輯宋榮堂發兌、頁は五十七丁。

奥付には、明治十四年二月二十二日 版權免許、同年三月出版
編輯人兵庫縣 福原謙七全縣下播磨國揖東郡鶴村二百番地寄留
出板人大坂府 田中太右衛門府下南区安堂寺橋通四丁目六十二番

發兌 東京 北畠茂兵衛山中市兵衛吉川半七小林喜右衛門

西京 風月庄左衛門田中治兵衛

書肆 大坂 松村九兵衛大野木一兵衛柳原喜兵衛、岡田茂兵衛

（注3）揖西光速『資本主義の育成』岩波講座日本歴史十六巻一九六七年刊四十九頁

（注4）干河岸貫一（一八四七—一九三〇）の『日本立志編』『先哲百家伝』『唐宗百家伝』の著者。

（注5）菅子の『牧民』の「倉廩実ちて即ち礼節を知り、衣食足りて即ち榮辱を知る」孟子「恒產無くして恒心有る者は惟だ士のみ能くするを爲す。」この二つが混じて「衣食足りて礼節を知る」となつたとされています。

（注6）『論語』雍也第六篇十一章にあるが、日頃の備えの意味では記述されていない。

『論語』もう一つの読み方

闇斎研究会の試み

高井 淳

江戸時代の学問というと儒学であり、そのテキストとして代表的なものが『論語』といえましょう。伊藤仁斎は「『論語』は宇宙一の書物である」と言っています。徳川家康も人質になつていた少年時代に『論語』を学び、生涯心の中にその教えを肝に銘じていたといいます。

山崎町にゆかりのある山崎闇斎は江戸時代前期の大儒学者で、門弟三千人ともいわれていました。系譜（注1）は最近まで続いていて優れた弟子を多く輩出しました。明治時代の官吏そして、教育者である山崎町出身の福原謙七もその系譜になります。謙七（当時は横尾姓）は一八七三（明治六）年に『重校四書論語』を堺の菊縁堂書店から出版しています。少年期から二十歳代の学びの深さが認められたのだと思います。また、令和三年のNHKの大河ドラマは、謙七と同年代の渋沢栄一が主人公です。明治期の日本における経済発展に大いに寄与し、第一国立銀行など日本の産業の基礎になる大企業の五〇〇社以上の設立にかかわっています。その渋沢の根本的な考え方は『論語』であることは有名です。彼は若い頃に従兄の尾高新五郎（惇忠）の元で学びました。

山崎闇斎研究会では、闇斎や謙七の基本の考え方に対するために、孔子と弟子との対話である『論語』を講読しています。進め方は井

波律子の『論語入門』と金谷治の『論語』を底本に各章の解説を、代表的な『論語』の学者である吉川幸次郎、貝塚茂樹、桑原武夫、加地伸行、宇野哲人のそれぞれの『論語』解釈につきあわせながら読んでいます。私たちは、令和二年度の例会で、五回十五時間にわたる学びの中で、深くて鋭い解釈に接するにつけ、孔子をはじめ弟子たちの人間性や対話に新鮮な感動を覚えています。それらを『論語』解釈対照表として整理してみました。これは前述の五人が『論語』をどのように解しているかを表したものです。

例えば、別表の8（注2）の述而7・18（注3）は、葉公に孔子のことを見た子路が答えなかつたのを聞いて、孔子は自分のことを「興奮して食を忘れ、楽しんで憂いを忘れ、老いたことも気づかない人だ」と言っています。井波先生は「この章は生き生きと明るく逞しい孔子の自画像だ」と好感を以て評しています。

また16の述而7・2では、学びと教える要点について、素直に「之」を記憶し、飽きずに励み、粘りづよく人に教えることだと孔子は言います。また、その要点について、四人が「孔子本人は出来ていると自信している」と解するのに對して、宇野先生だけは「何れも出来ていないと謙遜している」と解していく微妙な差異があり、私たちには最も面白い章です。そしてその「之」については「事柄」（吉川）、「礼樂」（桑原）、「理解したこと」（加地）、「事物の道理」（宇野）と四人の学者が様々な解釈をして興味深いです。

そして、17の為政2・17では孔子は「知っていることと、知らないことを区別することが知ることだ。」と、率直で豪快で暴走しがちな子路に分かりやすく諭しています（金谷・吉川・貝塚・加地）。

『論語』も一つの読み方

闇斎研究会の試み

高井 淳

江戸時代の学問といふと儒学であり、そのテキストとして代表的なものが『論語』といえましょう。伊藤仁斎は「『論語』は宇宙一の書物である」と言っています。徳川家康も人質になつていて少年時代に『論語』を学び、生涯心の中にその教えを肝に銘じていたといいます。

山崎町にゆかりのある山崎闇斎は江戸時代前期の大儒学者で、門弟三千人ともいわれています。系譜（注1）は最近まで続いていて優れた弟子を多く輩出しました。明治時代の官吏そして、教育者である山崎町出身の福原謙七もその系譜になります。謙七（当時は横尾姓）は一八七三（明治六）年に『重校四書論語』を堺の菊縁堂書店から出版しています。少年期から二十歳代の学びの深さが認められたのだと思います。また、令和三年のNHKの大河ドラマは、謙七と同年代の渋沢栄一が主人公です。明治期の日本における経済発展に大いに寄与し、第一国立銀行など日本の産業の基礎になる大企業の五〇〇社以上の設立にかかわっています。その渋沢の根本的な考え方は『論語』であることは有名です。彼は若い頃に従兄の尾高新五郎（惇忠）の元で学びました。

山崎闇斎研究会では、闇斎や謙七の基本の考え方につけるために、孔子と弟子との対話である『論語』を講読しています。進め方は井

波律子の『論語入門』と金谷治の『論語』を底本に各章の解説を、代表的な『論語』の学者である吉川幸次郎、貝塚茂樹、桑原武夫、加地伸行、宇野哲人のそれぞれの『論語』解釈につきあわせながら読んでいます。私たちは、令和二年度の例会で、五回十五時間にわたる学びの中で、深くて鋭い解釈に接するにつけ、孔子をはじめ弟子たちの人間性や対話に新鮮な感動を覚えています。それらを『論語』解釈対照表として整理してみました。これは前述の五人が『論語』をどのように解しているかを表にしたものです。

例えば、別表の8（注2）の述而7・18（注3）は、葉公に孔子のことを問われた子路が答えなかつたのを聞いて、孔子は自分のことを「興奮して食を忘れ、楽しんで憂いを忘れ、老いたことも気づかない人だ」と言っています。井波先生は「この章は生き生きと明るく逞しい孔子の自画像だ」と好感を以て評しています。

また16の述而7・2では、学びと教える要点について、素直に「之」を記憶し、飽きずに励み、粘りづよく人に教えることだと孔子は言います。また、その要点について、四人が「孔子本人は出来ていると自負している」と解するのに対し、宇野先生だけは「何れも出来ていないと謙遜している」と解していく微妙な差異があり、私たちには最も面白い章です。そしてその「之」については「事柄」（吉川）、「礼楽」（桑原）、「理解したこと」（加地）、「事物の道理」（宇野）と四人の学者が様々な解釈をして興味深いです。

そして、17の為政2・17では孔子は「知っていることと、知らないことを区別することが知ることだ」と、率直で豪快で暴走しがちな子路に分かりやすく諭しています（金谷・吉川・貝塚・加地）。

他の三人の先生は「区別が未知の領域の開発が可能になる」と、実践的学問論を示しています（井波・桑原・宇野）。一番面白いのは、すべての『論語』の権威者誰もが孔子その人を愛し、深く傾倒しているということです。

閻斎についてみると、『敬斎箴講義』（『日本思想大系31山崎閻斎学派』）の中で『論語』を引用しながら講義をしています。八十頁に「…、顏氏之四勿（顏淵12・1）、曾子之三省（学而1・4）、…」とあり、人の道、儒学の根本は「敬」であることを説明するときに、『論語』に拠っています。また、謙七の思想も、『論語』の学びが大きく影響しており、それは『現代兵庫県人物史』に紹介されている謙七像についての叙述に見られます。

今後も、各会員がそれぞれの『論語』の著者の解説の特徴を心に刻み『論語』の楽しさと共に孔子の人柄や弟子との関係などを感じられたらと思っています。また、小稿の構成と記述に山崎閻斎研究会の鎌田裕明会長、解釈対照表作成には会員の皆さんのが貴重な助言を戴きました。お礼申し上げます。

最後に『論語』の講読に使った参考本の著者などについて簡単にご紹介したいと思います。

【井波律子】一九四四年～二〇二〇年、富山県生まれ。京都大学文学部卒業、一九七二年京都大学大学院博士課程修了。金沢大学教授、国際日本文化研究センター教授を経て、同名誉教授。専攻は中国文学。吉川幸次郎の弟子。

【金谷治】一九二〇年～二〇〇六年、三重県生まれ。東北帝国大学卒業。東北大学教授を経て、同大名誉教授。文学博士。

【吉川幸次郎】一九〇四年～八〇年、兵庫県生まれ。京都帝国大学文学部卒業。専攻は中国文学。京都大学教授を経て、京都大学名誉教授。

【桑原武夫】一九〇四年～八八年、福井県生まれ。仏文学・文化研究者。京都帝国大学卒業。一九四八年京都大学人文科学研究所教授、一九六八年京都大学名誉教授。

【加治伸行】一九三六年、大阪府生まれ。京都大学文学部卒業。専攻は中国哲学史。一九八三年大阪大学文学部教授、一九九七年大阪大学名誉教授。立命館大学教授。文学博士。

【宇野哲人】一八七五年～一九七四年、熊本県生まれ。中国哲学者。東京帝国大学卒業。東京大学名誉教授、実践女子大学名誉学長。

【山崎閻斎】一六一八年～八二年、京都生まれ。祖父淨泉は山崎の人。京都の儒学者。三代將軍家光の実弟保科正之の賓師となり大きな影響を与える。のちに神儒一致の垂加神道を唱える。

【福原謙七】一八四一年～一九二四年、山崎町生まれ。明治の初めに、地域の官僚として教育と行政の骨組みづくりに尽力、若者を育てかつ地域産業の発展にも寄与、後半生は中央の政治にも関わる。

（注1）本條衛「崎門学派系譜」「閻斎神社と山崎閻斎について」No.7平成二九年六月七日刊

（注2）井波律子著『論語入門』の記述の順番を示しています。

（注3）「述而7・18」は「述而第7篇18章」の簡略化表現です。

『論語』解釈対照表(一部掲載)

底本 (注2)	論語篇章 (注3)	井波律子	金谷治	吉川幸次郎	貝塚茂樹	桑原武夫	加地伸行	宇野哲人
		『論語入門』 岩波新書 2012年版	『論語』 岩波文庫 2002年版	『吉川幸次郎全集』第4集筑摩書房1998年版	『論語』 中公文庫 2013年版	『論語』 筑摩書房 2006年版	『論語』 講談社学術文庫 2012年版	『論語』 講談社学術文庫 2015年版
		担当会員	鎌田裕明	高井淳	堀口真吾	松下宣夫	久崎正博	
1	為政 2. 3. 4. 5. 章	意欲的な少年時代、積極果敢な青壯年時代から、受容の精神に浸された晩年へ。この簡潔な自伝は孔子の軌跡をみごとに浮き彫りにしている。	「子曰、吾十有五而志乎学、三十而立、四十而不惑、…」 〔乎〕は「干」の表現もある。天命とは道徳的の使命か人力を超えた運命か。	「耳従う」「天命」は抽象にすぎて私にはよくわからない。	孔子が万事控えめで、反省心が強く、自己を誇らず、いつも苦難に満ち、試練にさらされて成長してきたその生涯を、無限の感慨をもつてふりかえっての発想。	この章は規範的にも歴史的にも読むことができるが、聖人の生涯なので一つの規範ないし模範と受け取るのが自然である。	「天命」を「宿命」「あきらめ」とはせず、天が与えた使命と自覚し奮闘する。	絶えず修養を積み、人格の向上を図る。道に志すものの手本。
3	為政 2. 1. 2	経験の深い襞(ひだ)を織り込んだ、含蓄に富む言葉。孔子自身は身分が低く多能であったが、君子は専門化された器であつてはならないという。	「子曰、君子不器。」	紳士は技術的でない。	人間はそんな、一つのはたらきをしかしない機械であつてはならない。たんなる専門家ではいけない。	すべての人が技能を当然持ちらながら同時に広い視野と行動力を持ちうるようでありたいという希望を示すものと、受け取りたい。	教養人は一技・一芸の人ではなく、大局を見ることができる人である。君子は器物ではなく、器物を動かす者だとする説もある。	君子は広く事物の道理を窮めて何事にも応じることができる。
8	述而 7. 1. 8	どんな逆境でも、躍動感あふれる明朗さを失わず、たくましく生きた自らの姿をみごとに表現した自画像。	「葉公問孔子於子路、子路不對、子曰、女奚不曰、其為人也、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至也云爾。」	『論語』のうちで最もいきいきしたもので私の甚だしく愛する条である。	憤っては食を忘れ、楽しみでは憂いを忘れ、老いの将に至らんとするを知らざるのみ。	子路は孔子が偉大すぎて答えられなかった(新註)。またうつかりたことはいうべきではないと慎重にかまえたのかもしれない。	発憤して努力し続け飲食もわざれ、得た境地を楽しんで憂いを忘れ、老境に至ることも気づかない。	孔子が自己の学問に熱心なことを述べた。
14	為政 2. 1. 5	学びと思考のバランスをとりつつ、持続することの重要性を説く。現代に通じる知性論、学問論。	「子曰、学而不思則罔、思而不学則殆。」学とは本を読み先生に聞く、外からの習得をいう。	孔子の学問論としてはなはだ重要な条である。	「学ぶ」は先王の道を習うこと。「思う」は考えること。両面からものをながめる立場はカントに通するものがある。	学的生活における問題を「学」と「思」との対比においてとらえたもの。「殆」は古註では「つかる」失注では「あやうし」桑原氏は「まどう・惑う」と解した。	「知識」と「思考」はどちらかのみであれば、一方的・独善的になってしまいます。	学ぶ=広く先人の経験などを学び習うこと。思ふ=己の心で考えて道理を求めること。「思うて学ばず」ということは若い人たちによくある弊ではなかろうか。
16	述而 7. 2	あれこれ穿鑿(せんさく)せずに学びを記憶し、学問に励み、粘りづよく人に教えることという三要点を示す。何の苦にもならぬないと孔子は自負している。「之」は明示せず。	「子曰、默而識之、学而不厭、诲人不倦、何有於我哉。」「我に於いて何か有らんや」を自負している。「之」は明示せず。	書き下し文で「厭わず。」と句点を使う。他の先生は読点、「我に於いて何か有らんや」を自負している。「之」は事柄。	「我に於いて何か有らんや」を自負している。「之」は明示せず。	「我に於いて何か有らんや」を自負している。「之」は礼楽。	「我に於いて何か有らんや」は道を望んでまだいざれも出来ていないという心をあらわした謙遜の辞である。「之」は事物の道理。	「我に於いて何か有らんや」は道を望んでまだいざれも出来ていないという心をあらわした謙遜の辞である。「之」は事物の道理。
17	為政 2. 1. 7	多様な角度から語る実践的学問論。対象となる事柄を区別・分類して把握し、提示する。「知らずと為す」	「子曰、由、諱女知之乎、知之為知之、不知為不知、是知也。」「由」は子路の名。「女」は原本・清本では「汝」。両字は適用。「知らずと為せ」	「知らずと為す」	子路は正直派で元気で勇気があった。知らないことを知っていると主張しかねない短所を直すようにさせた。「知らずと為せよ」	「知る」と「知らない」の区別が行動を明確にし、未知の領域の開発が可能になる。「知らずと為す」	子路は気持ちがまっすぐで、それをすぐ表わす情熱家。「知らずと為す」	知らないことを知りうる求めるから「之を知る」道がある。「知らずと為せ」

井波は章を条という

吉川は章を条という

「山崎歴史郷土館」（六）

河本雅視

山崎町の歴史（江戸時代）

一、はじめに

前回の、長水城落城後、龍野城主木下勝俊二三年間、続いて姫路城主池田輝政一三年間という三五年間は、外部からの領主による治世でしたが、元和元年（一六一五）には新しく宍粟藩が出来、宍粟藩三万八千石の山崎城が山崎町鹿沢に築城されて藩主直々の治世が行われるようになりました。

二、池田輝澄宍粟藩三万八千石の領主

元和元年（一六一五）姫路城主池田輝政四男輝澄が宍粟三万八千石を受領しました。

宍粟三万八千石の領主となつた

輝澄は、山崎の地を本拠地として鹿沢に城を構えました。

輝澄の城下町の構えは、絵図が無く不明ですが、延宝年間（一六七三年頃）の絵図が郷土館展示室前の壁面に掲示してあります。基本的に輝澄の時代にこのような



本丸跡（紙屋門の内側に本丸、外側に巾18mの内堀）

三、輝澄は徳川家康の孫

輝澄は、家康の孫にあたります。祖母は家康の側室西郡局（蓮葉院）であり、母は家康の次女督姫（良正院）です。督姫は姫路城主池田輝政に再嫁して四男輝澄が生まれました。

山崎町山田町にある青蓮寺は、輝澄が元和四年姫路にあつた祖母蓮葉院の菩提寺をこの地に移したお寺であり、祖母蓮葉院と母良正院の菩提寺として建立されました。



青蓮寺内。輝澄の祖母蓮葉院の御廟屋

城下町を築いたのではないかと想像出来ます。

この絵図を参考に、町史等によると、城が持つ防備の堀（内堀・中堀・外堀）などが築かれております。

本丸・二の丸・そして三の丸を築き、本丸は三方を巾十間（一八米）の薬研堀（やげんぼり）の内堀で囲み、そしてその東西に二の丸を置き、その二の丸を囲む幅八間（約一五メートル）の中堀を東西と北に、そしてその外に三の丸（武家屋敷）をおいてその北側の町屋との間には、巾約三間（約五メートル）の外堀を置き、そしてまた、南側には崖があり、崖の下は水路を引き込んだ堀を巡らしており、完全な防備を備えた「城」としての構の城郭であつたと思われます。

の御廟屋（おたまや）があります。

また、本堂裏の墓地には、輝澄の時代に資財を投じて高瀬舟の運航を可能にした山崎町の龍野屋孫兵衛のお墓もあります。

四、輝澄の時代

木下勝俊・池田輝政によつて一筋の町が出来ていました。が、輝澄の時代になると城郭が築かれ、陸路そして水上交通の高瀬舟等、交



出石の船着場跡

より網干、そして高砂大坂方面へと送られました。この頃山崎には多くの業者や商店が集まり、交通の要衝として、また、城下町として大きく発展したと思われます。

しかしながら、寛永八年輝澄の弟政綱（赤穂藩主）の死亡に関連して、佐用二万五千石の加封になりましたが、新規召し抱えの家臣と、旧家臣との間に対立が生じることになりました。しかも、運悪く藩主輝澄は江戸参勤の途中病に倒れ江戸に在り、留守中のこと、山崎では家老たちによつて藩政を執行していましたが、足軽同士の些細な揉め事から発展して遂に新旧家老同士の対立となり、そのことが藩主輝澄にも正しく伝わらず、そしてまた他藩からの仲裁も聞き入れられず、ついに寛永一七年伊木家老達一一人は集団脱藩しました。このことが幕府の知るところとなり、藩主輝澄は鳥取鹿野へ蟄居（ちつきよ）を命ぜられました。

特に水上交通については、輝澄の時代元和年間に、龍野屋孫兵衛が莫大な資を投じ、岩石を取り除き、水路を開き航通の便を与え、その功により幕府勘定役より、山崎藩家老に文書が出され、二艘の免許舟を得たという事が、宍粟郡誌に記されています。また、この二艘は布に日の丸を書き、それを目標として、特別扱いであったようです。

その後、英賀屋弥次兵衛・米屋六兵衛をはじめ船主も増え、元和年間に川船も多くなり、それまでの陸路輸送から、水上輸送へと変わり、宍粟の多くの産物、薪炭、米等をはじめ、有名な千草鉄をはじめ銅・銀など鉱物も、それまで山越で他地方へ出荷していましたが、それが山崎の東西の出石（いだいし）へ集められて、高瀬舟に

五、山崎藩 藩主変遷の概要

- ①一六一五 一代 池田輝澄 姫路城主池田輝政4男。宍粟三万八千石・後宍粟佐用六万三千石。お家騒動で鳥取鹿野へ蟄居（在任二五年）
- ②一六四〇 一代 松平康映 泉州岸和田より移封、宍粟佐用五万石。松平姓を許された家系。康映の時代に、町の東・西・北方入口に木戸が出来門番を置いた。善政。慶安二年石見の国浜田へ所替え。（在任一〇年）

移封（三九才）。宍粟三万石。民生の安定に家臣を督励して努力をした。年六〇一才（在任二三年）

④一六七一 二代 政周 宍粟三万石。恒元嗣子。延宝五年（一六七七）正月八日江戸に於いて没した。年三三歳。（在任六年）

⑤一六七七 三代 数馬 宍粟三万石。政周に嗣子が無く、池田本家より養子縁組、年わずか六歳。翌年の一月亡くなつた。（在任一年）宍粟藩池田家断絶。

⑥一六七九 初代 本多忠英 山崎一万石。大和郡山より移封。学問の奨励。文武・絵画・茶事・香道を嗜む文化人。享保三年没す。（在任三九年）本多藩は一万石、陣屋となる。

⑦一七一八 二代 忠方 山崎一万石。一〇歳で家督相続。本家忠勝の像を模写し山崎に安置。

享保の大飢饉。台風洪水で大凶作。（大雲寺米一五俵分の粥を施した）若く一三才で死去。（在任一三年）

⑧一七三一 三代 忠辰 山崎一万石。忠方の弟。二二歳で家督を継ぐ。江戸での出費多く藩財政窮乏。享保の大飢饉の最も激しい時代。旱魃・大風と洪水による凶作で農民強訴。四十才で江戸にて没す。（在任一九年）

⑨一七五〇 四代 忠堯 山崎一万石。一四才で家督を継ぐ。この頃諸藩では藩政改革で新旧対立。（在任二二年）

⑩一七六一 五代 忠可 山崎一万石。越前丸岡藩より養子、二才。文武を奨励、人材主義で改革。一七八三年天明の大飢饉。英君。（在任二七年）

⑪一七八八 六代 忠居 山崎一万石 食糧不足で強訴の中、先代に抜擢された家老がよく藩政に尽力する。忠居病身にて隠居。（在任二十四年）

⑫一八一二 七代 忠敬 山崎一万石。二〇才で家督を継ぐ。一八三二年天保の大飢饉。播磨西部で百姓一揆、藩財政窮乏。（在任二二年）

⑬一八三四 八代 忠鄰 山崎一万石 忠敬の弟。兄病弱にて家督を継ぐ。安政三年段村で大砲三門鋳造。英君 明治維新を迎える。（在任三五年）

本多家は、延宝七年（一六七九）から明治二年（一八六九）の廢藩置県まで一九〇年間八代続きました。

六、山崎城下町の特徴

山崎の城下町は他の陣屋町には見られない特徴があります。それは、一般的には陣屋には防備のための堀や石垣等は築くことが出来ませんが、山崎藩は最初三万八千石の城から出来ており、一万石の陣屋になりましたが、城時代の名残を見ることが出来ます。

山崎町金谷四号墳の発掘調査

田路正幸

九一七）に「瑞雲双鸞八花鏡」と呼ばれる奈良時代の銅鏡が出土しています（注6）。

金谷四号墳は、湯舟口の東北方約二〇〇メートルのところにある曾谷と呼ばれる南向きに開いた谷の入り口北側に張り出した小さな尾根の西斜面に築かれています。斜面には、三〇～五〇センチメートル大の数個の石が露出しており、これが横穴式石室を構成する石材と考えられました。また、昭和四十六年（一九七一）には、この場所で須恵器の壺が出土したことから古墳と考えられていたものであります（注7）。

なお、工事前の分布調査で、四号墳の南東約六〇メートルの尾根の先端部で古墳の墳丘と判断される直径約十五メートル、高さ約一・五メートルの地形の隆起が認められたことから、これを金谷五号墳と呼ぶこととしました。

三、発掘調査の結果

四号墳については、周辺がかつての曾谷池の改修に伴う作業道の工事により大幅に改変されているため、墳丘の形状や規模については明らかではありませんが、わずかに円形の張り出しが認められることから直徑一〇メートル前後の円墳であると考えられます。

二、金谷四号墳の位置

城下平野の西方には、標高四五八・四メートルの国見山がそびえています。その東の山麓に築かれているのが、金谷古墳群です。今回の中の調査地点の南側の湯舟口では、一号墳～三号墳の古墳時代後期の三基の古墳が残されており、そのうち一号墳からは、大正六年（一

調査前には、上下に設けられた二つの作業道の間の斜面には、約一・五メートルの間隔で水平方向に石材の露出が認めらました。周辺の表土及び石材の間の堆積土を除去して行つたところ、徐々に石積が姿を現し、最終的に横穴式石室の奥壁と左側壁の一部が残存することを確認しました。

石室の西側及び南側と上部の大半は削平によつて失われており、全体の規模や袖石、羨道の状況は分かりませんが、南西方向に開口部を有する横穴式石室であることが明らかとなりました。

石室の残存状況は、平面の基底部で奥壁が東側の一石分約六〇センチメートル、左側壁が四石分約一・九メートルを測っています。高さは、奥壁が二段分約九〇センチメートル、左側壁が二～三段分七〇～八〇センチメートルが残存しています。

奥壁には、五〇～六〇センチメートル大の石材を平らな面を内側に向けて積み上げています。左側壁は、横五〇センチメートル前後、縦三〇センチメートル前後の石材を横置きにし、隙間には一〇～三〇センチメートル大の石を詰めています。奥壁の際を幅四〇センチメートルにわたつて掘り下げたところ、五センチメートル大の河原石混りの粗い砂が検出されたことから、石室の床面に敷かれていたものと考えられます。

奥壁の裏側には、黒褐色の土が堆積しており、石室周囲の裏込め土と見られますが、栗石については明らかにできませんでした。

四、発掘調査のまとめ

以上、発掘調査の結果から金谷四号墳は、南向きの谷の入り口に築かれた直径一〇メートル前後の円墳で、横穴式石室を埋葬施設とすることが明らかになりました。

今回の調査では、建築時期を直接に示す石室内からの土器の出土は認められませんでした。しかしながら、墳丘及び横穴式石室の規模が小型であること、石室全体の使用石材が比較的小振りであるこ

と、石材の積み上げがやや粗雑であることなど、横穴式石室としては退化傾向を指摘することができます。加えて、かつて出土した須恵器の坏（注8）の年代観から古墳時代後期でもやや新しい段階の七世紀中頃（約一三五〇年前）に築造されたものと考えられます。

四号墳の被葬者については、明らかではありませんが、古墳が築かれた位置などから、城下平野一帯に居住した有力氏族の古墳と考えられます。

時代は少し下りますが、『播磨国風土記』宍禾郡の比治の里の条には、山^{やま}部^べ比^ひ治^じという人物が里長を務めたので比治という地名が付いたという記事（注9）があることから、あるいは金谷古墳群の被葬者を考える大きな手がかりとなりそうです。また、金谷一号墳から出土した「瑞雲双鸞八花鏡」などは、この地域の歴史的重要性を物語る貴重な資料とることができます（注10）。

五、おわりに

金谷四号墳の発掘調査によつて、この地域の古墳時代の歴史の解明に新たな資料を加えることができました。

調査終了後、四号墳及び新たに確認された五号墳については、地元自治会関係者、事業担当の西播磨県民局光都農林振興事務所土地改良センターの方々のご理解とご尽力をいただき、現状で保存されることとなりました。とくに記して感謝いたします。

注1 沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉編著『播磨国風土記』 山川出版社 二〇〇五年

注2 『山崎町の文化財』（文化財シリーズ第2集） 山崎町教育委員会 一九八五年

注3 『兵庫県遺跡地図』 兵庫県教育委員会 一二〇一五年

注4 発掘調査の実施にあたり、西播磨県民局光都農林振興事務所土地改良センターのご協力を得ました。

注5 現地説明会の実施にあたり、金谷自治会の片山繁樹会長のご協力を得ました。

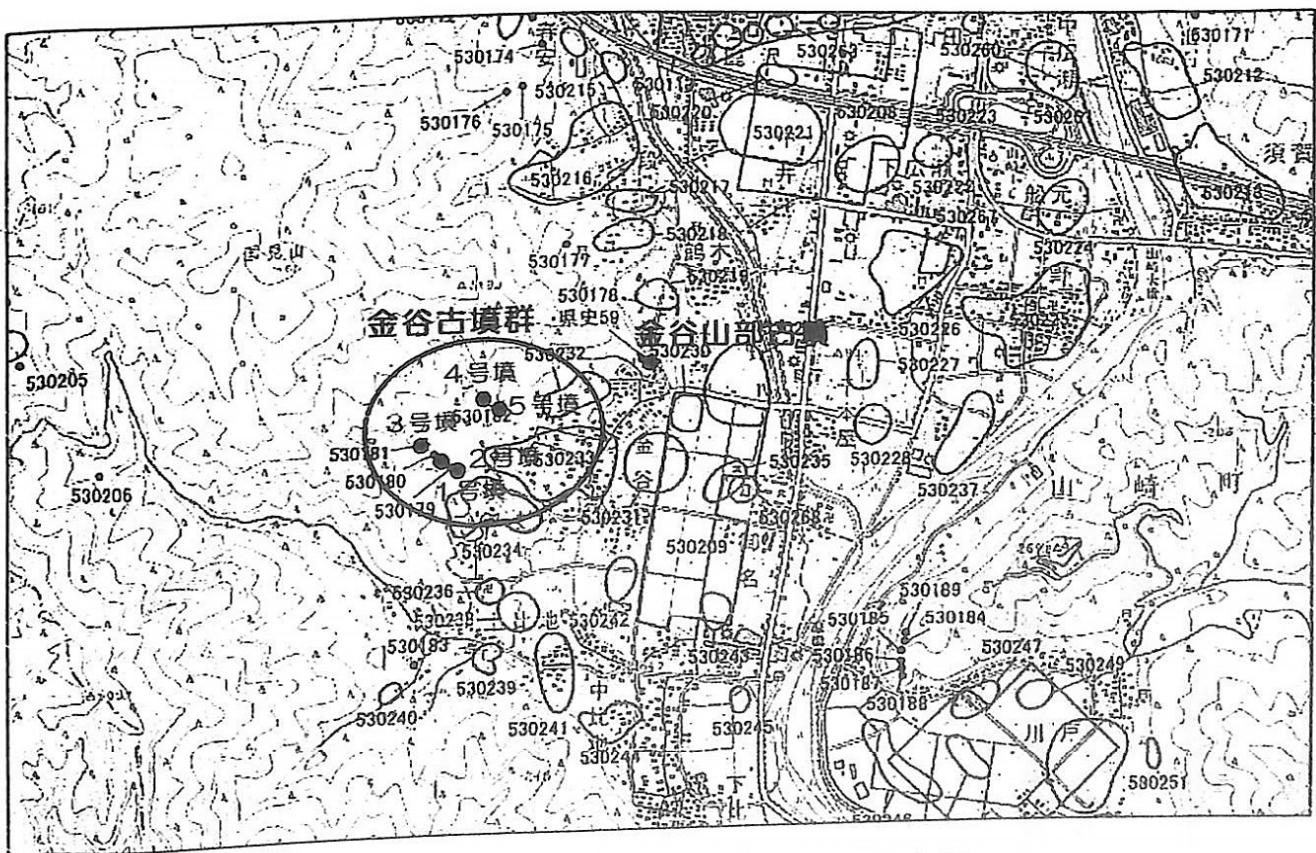
注6 後藤守一「本邦出土の唐式鏡」『考古学雑誌』第二十一卷第十二号 一九三一年

注7 片山昭悟氏には、多くのご教示と資料の提供をいただきました。

注8 片山昭悟氏には、写真の提供をいただきました。

注9 沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉編著『播磨国風土記』 山川出版社 二〇〇五年

注10 片山昭悟氏には、「奈良時代の鏡研究－出土地・伝世地を訪れて」（一九九七年）ほか、「瑞雲双鸞八花鏡」に関する多くの論考があります。



金谷古墳群・金谷山部古墳の位置(『兵庫県遺跡地図』に加筆)



金谷4号墳調査前（南から）



金谷4号墳調査前（東から）



横穴式石室表土除去（南から）



横穴式石室調査前（南から）



横穴式石室左側壁（南から）



横穴式石室全景（東から）



横穴式石室床面（南から）



横穴式石室奥壁（東から）

金谷古墳を守る会について

金谷の古墳を中心に

金谷古墳を守る会

片山昭悟

はじめに

金谷古墳を守る会は、昭和四十四年（一九六九）に金谷青年団で発足しました。今から五十年前になります。当時は、日本列島改造論という名のもとに開発が全国各地で進んでいました。このため私達で金谷の古墳を守ろうと話しました。金谷の古墳に立て札や案内板を設置して住民にも古墳を守ろうと呼びかけました。

その後、国見山が兵庫県により開発されることになり、金谷には二千年前の弥生時代から歴史があります。金谷古墳や国見山の西の山には、天正時代の柏原城や室町時代からある山岳寺院の長谷山遊鶴寺、江戸時代の金屋鑄物師の長谷川氏があり、貴重な文化財で保存していただきました。

今回、曾谷池改修工事と湯船池の改修工事がはじまりました。曾谷池の近くには金谷四号墳と五号墳があります。湯船池の近くには、金谷一号墳と二号墳、三号墳があります。いずれも貴重な古墳を保存していただきましたようお願いしていました。

このことについて概要を紹介させていただきます。

地理的歴史的環境

宍粟市山崎町金谷は、国見山が背景に城下平野や揖保川の蛇行す

るところや川戸の山々が一望できるところです。

金谷は、「播磨國風土記」の比治里で里長の山部比治から名付けられ、近くには古代寺院の千本屋廃寺があり、歴史的にも古く、古墳が多くあります。兵庫県指定文化財（史跡）の金谷山部古墳や字湯舟口には金谷群集墳（三基）のうちの金谷一号墳からは、奈良時代の鏡瑞雲双鸞八花鏡（径十一・〇センチ）が出土しています。

金谷三号墳と四号墳と五号墳について

九月から曾谷池改修工事と湯船池の改修工事がはじまりました。

湯船池の改修工事に伴い、字湯舟口で通称成林の金谷三号墳は、近くに改修工事の残土処理を計画されていて、三号墳は、径約十メートルの円墳です。大正六年（一九一七）に盜掘され、横穴式石室は、幅約二メートル、長さ約五メートルで、石室が露出しています。三号墳については、事前協議で現状の三号墳から西へ約十メートルところに移動することになり保存していただきました。

曾谷池近くには金谷四号墳と五号墳があります。

四号墳から昭和四十六年（一九七一）十月十八日に、七世紀代の須恵器（环）が出土しています。かつては円墳でしたが、昭和五十二年（一九七七）の曾谷池工事で天井石や石室の南部分が削平されています。

このたびの曾谷池改修工事の仮設道路で、大型車が通ることから、四号墳が取り壊されることになりました。宍粟市教育委員会で発掘調査をしていただき、横穴式石室がみつかりました。横穴式石室の奥壁と北側壁石が残存していました。

このため四号墳は、西播磨県民局で特別に工事の設計変更をして

いただき、保存されることになり、金谷五号墳とともに、十一月三

日には金谷自治会で地元説明会をしていただきました。小学生や地元の多くの方々が参加し、千三百五十年ほど前の金谷の貴重な古墳を見学していただきました。

なお、金谷五号墳は、金谷四号墳から東に約五十メートルの金谷字法師ケ谷の先端に位置する古墳です。横穴式石室は、昭和三十年代ごろ（一九五五、一九六五）に除去されていますが、墳丘の南部分が残存していて墳丘の裾からみて約十二メートルの円墳であることがわかります。この古墳を金谷五号墳とすることになりました。

この古墳も金谷にとつて大変貴重な古墳です。
十二月十二日には金谷自治会のご協力で、金谷四号墳と金谷五号墳がわかるように立札を設置しました。

おわりに

今回の調査で時期的には出土した須恵器や横穴式石室の規模から七世紀中頃の飛鳥時代の古墳で、被葬者はおそらく比治里の山部氏に関連する人であろうと思います。金谷の古墳を守り続けて五十年になります。これからもふるさと金谷の古墳を守り次代に伝えていきたい。



金谷四号墳横穴式石室



金谷四号墳



金谷五号墳



図 金谷の古墳位置図

会員・家族の文芸

◎冠 句 (つた・いさわ・加生・山崎冠句会)

片便り 空家となりし友何処
ベンにぎる 変わらぬ癖字友わかり
片便り 父母の写真に『元気です』
ベンにぎる 姿勢正して思い込め
片便り 絵手紙書いて近況を
ベンにぎる 冠句の世界のめり込む
片便り 返事の望み尽きるまで
ベンにぎる 書き出し悩みはや五分
片便り 忘れてしまふこの思い
ベンにぎる 思いを文字で届けたい
片便り 届いていいか電話する
ベンにぎる 元気ですかと久方に
片便り 届かぬも良し月汎えて
ベンにぎる 今日一日を振り返る
片便り 友の訃報を伝え聞く
ベンにぎる 疎遠の友に安否問う
片便り 紫煙の向こう笑み同じ
ベンにぎる 貴方にとどけこの想い
片便り 願いを込めて流れ星
ベンにぎる 冠句浮んだ夢の中
片便り また帰るのを期待して
ベンにぎる 昔の事を思い出し
片便り 仲間の暮らし風で知る
ベンにぎる 世の一大事後世に

坂本	坂本
忠彦	忠彦
千里	千里
嶋津	嶋津
高井	高井
怜依	怜依
西家	侑希
侑希	侑希
三木ひづる	三木ひづる
飯塚	飯塚
正浩	正浩
田中	田中
良子	良子
鳥羽チエノ	鳥羽チエノ
三浦	三浦
ゆき	ゆき
志路	志路
大谷	大谷
志路	志路
実友	実友
勉	勉
谷釜	谷釜
まや	まや
里見	里見
和樽	和樽
高井	高井
智代	智代
速水美知代	速水美知代
宗平	宗平
圭司	圭司
京屋	京屋
伊助	伊助
杉山美保子	杉山美保子
宇田	宇田
幸夫	幸夫
中瀬	中瀬
公三	公三
中瀬	中瀬
公三	公三

◎俳 句

貞觀の大地震記録秋長ける
蛭降るヤルソンに散りし兄の墓碑
玄関に旧知の友やシクラメン
待ちわびし吉報届く桜鯛
不動の滝白糸散らし里の秋
源流を訪ねし山の朱き秋
外灯に鈍く光りて冬木立
一人居の気ままな時間木の実降る
茶の花や門にけんばー子らの声
いつせいに鳩の飛翔や神の留守
ゆきすりの人にもゆれて吾亦紅
華やかに風に耐ふるも花芒
食卓に薬の袋今朝の秋
食い込みし足の爪切る夜長かな
落葉踏む羅漢の里に早入日
お手前の花に広がる花野かな
舞ふ雪に子ら行くうしろ姿かな
闇深し草木をむすぶ薄氷
二十年先は無人の村に春
人以外も生きる地球や春の月

京屋	京屋
伊助	伊助
高井	高井
麗子	麗子
田中	田中
良子	良子
鳥羽チエノ	鳥羽チエノ
三浦	三浦
ゆき	ゆき
志路	志路
大谷	大谷
和樽	和樽
里見	里見
高井	高井
智代	智代
速水美知代	速水美知代
宗平	宗平
圭司	圭司

事務局だより

令和二年度の通常総会について

記

日 時 令和三年四月十日（土）午後二時より
場 所 宍粟防災センター四階研修室
議 事 一、令和二年度事業報告について
二、令和二年度会計報告について
三、令和二年度監査報告

四、令和三年度事業計画について

五、令和三年度会計予算について

六、役員改選について

記念講座として、記録映画「遺跡は語る Part 2 『伊和中山古墳』」の上映の予定です。

編集後記

『山崎郷土会報 第一三六号』をお届けします。

新型コロナウイルスの感染防止と三密の防止で第一三六号ができるかできるかどうか危惧していました。

原稿をお願いしたところ会員の皆さまのご協力により、いずれも

力作が集まりました。会員の皆さまがあつて郷土会報ができます。

今年は丑（うし）年です。干支の二番目です。

牛のようにゆっくりと一步一歩歩むことができればと思います。
山崎郷土会報は、郷土山崎の調査と研究と山崎の歴史を次代に伝えることであり、会員の皆さまに読みやすくわかりやすいもので、心に響くものであることです。

山崎郷土会報をより充実した内容を心掛け、地域で取り組んでおられることや地域に伝わる伝承についても原稿を募集します。

なお、会員の皆さまにとつて良き年でありますよう祈願します。
本文中の原稿については、原文を尊重して編集しています。

（片山昭悟）

会員の著作紹介

片山昭悟さんが、『私の心の雑録集 IV ふるさとの調査と研究を中心にして』を令和二年九月に出版されました。

片山さんは、四〇年にわたって「山崎郷土研究会」の会員として、そして七年前からは会報部長としてご活躍です。

内容は「比地条里の研究」、「城下小学校のふるさと学習」、「福知の荒神社と御形神社についての論考」など、現場の写真と説明図がつけられて、楽しく読めるふるさとの歴史についての情報誌です。
片山さんの逝かれたご両親と姉の供養にとの思いを添えたこの書は、氏の敬虔（けいけん）なお人柄が行間から溢れ、読み物としても一読の価値があります。

なお、この本は、宍粟市立図書館に配架してあります。

（鎌田裕明）

外科・内科 山中医院

院長 山中潤一

山崎町西町・TEL 0036

PHOTO-STUDIO *Meyama* P.C.S スタジオウエヤマ

●山崎店 兵庫県宍粟市山崎町山田204
TEL (0790) 62-8027
FAX (0790) 62-8827

老松酒造有限会社

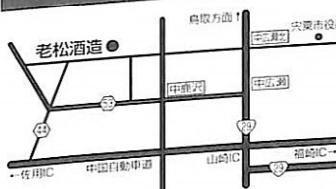
■老松ダイニング
発酵と麹の健康ランチ
定休日:木曜日(予約優先)



■老松販売所
日本酒・リキュール・麹商品

老松酒蔵見学出来ます

〒671-2577
宍粟市山崎町山崎12
電話0790-62-2345



- 相続手続時、名義変更に関するアドバイス
- 各種税務手続き
相続税・贈与税確定申告手続 電子申告環境サポート
所得税確定申告
- 経理自計化のお手伝い
- 法人税・地方税・申告書作成代行
- 経営助言

〒671-2533 兵庫県宍粟市山崎町須賀澤1329-7
高橋利典税理士事務所
税理士・行政書士 高橋利典
TEL (0790) 63-2150 / FAX (0790) 63-0445

ほっこり、ひといき 伊沢の里

- 各種宴会 祝い、法要、同窓会(送迎バス有り)
- 宿泊 観光、ビジネス 帰省
- 日帰り入浴 桧風呂、露天風呂、サウナ
- レストラン 御膳、定食、麺類、丼物

兵庫県宍粟市山崎町生谷214-1
TEL.0790-63-1380 FAX.0790-63-0362
URL:www.isawanosato.com E-mail:info@isawanosato.com

株式会社 安井書店

兵庫県宍粟市山崎町山崎90 〒671-2577
TEL (0790) 62-0700(代) FAX (0790) 62-0700

E-mail:gaisyo@yasuisyoten.co.jp
URL: http://www.yasuisyoten.co.jp/

まごころを伝えます。

地酒 山陽
一献献上 品質本位
**一播
獻州**
確かな品質と味わい。
SANYOHA
SANYOHA I
山陽益酒造株式会社
兵庫県宍粟市山崎町山崎28

TEL.0790(62)1010 FAX0790(62)6218
E-mail info@sanyohai.com HP http://www.sanyohai.com



パンフレット・デザイン広告
名刺・封筒・伝票・新聞広報誌
ポスター・案内状・シール等

(有)稻田印刷

〒671-2577 兵庫県宍粟市山崎町山崎454
TEL (0790) 62-0254 FAX (0790) 62-4764